九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

佐多稲子とセクシュアリティのメッセージ

野本，泰子
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494507

出版情報：比較社会文化研究. 10, pp.37-45, 2001-10-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第10号（2001）37～45頁
Social and Cultural Studies
No.10（2001），pp.37～45

佐多稲子とセクシュアリティのメッセージ

野　本　泰　子

はじめに

佐多稲子に「なやましき裏面」という題の一篇の詩がある。本稿は，この謎のような詩を読み解くことによって，佐多稲子のセクシュアリティ[1]のメッセージを聞こうと期待する試みである。秘密はしばしば，性的なものに結びつく[2]が，この詩に感じられる秘密の色合いを，セクシュアリティに結びつけることが出来るかどうかを，佐多の作品と生涯，および，当時の性規範に照らし合わせて，論証する。詩を解釈する際に参考とする主な作品は『素足の娘』[3]である。したがって，本稿が解明を試みるのは，佐多の「娘についてのセクシュアリティのメッセージ」である。佐多稲子が性について優れた洞察力の持ち主であることは，所謂「『たけくらべ』論争」[4]における美登利変貌の原因への佐多の洞察によって，つとに知られている。本稿のキーワードである「セクシュアリティ」は，本文中で，「性」とも書き表わすことにする。

1．「なやましき裏面」とその三つの解釈

「なやましき裏面」の検討を始めるに当たって，まず，その詩全体を引用しておこう。

なやましき裏面

ああ，思い出してはいけない
そつと胸の奥に
しまっておかなければ

もしあやまりて
指でもふれやうものなら
からだ中ははずかしさにふるへ
又，火の様にもえてくる
涙は頬をつたひ
胸は苦しさに波打つ
もし出来得る事ならば
自分のからだをひきさいて
ごみための中に
打つちやつてしまつただらう。

決して決して思ふまい
一番奥にしまひ込んで
錠を下ろしておかふ
そして，人の世を
あざむいてゆくのだ。

（『文芸通報』，1922年〈大正11年〉）[5]

佐多は習作詩について，『佐多稲子全集第一巻』の「あとがき」[6]で，「いわば私のつぶやきとでもいうようなものとして，数篇の詩がある。尚，編集の人たちは，私がはにかんで隠しておいたものも探り出した。習作として載っている数篇がそれである。」と書いているが，「なやましき裏面」もその時に見つけられたのであろうか。しかし，この詩は『全集』には掲載されていない。習作詩は佐多の青春期の「つぶやき」であってみればなおさら青春期の思いをありのままに吐露した貴重な資料とみることができる。まず，この謎めいた詩を詩句に添って解釈することから始めよう。書き出し部分の「そつと胸の奥に/しまつておかなければ」と終わりの「一番奥にしまひ込んで/錠を下ろしておかふ」という詩句から自ずと浮かび上がってくるイメージは，作者の胸の奥には，何か，秘密の小箱か部屋，あるいはクローゼットのようなものがあって，作者は，そこに秘密をしまい込んでしまいたいという。そして，その重々しい扉がイメージとして浮かび上がる。さらに詩句に秘密は明らかにされないが，「もしあやまりて/指でもふれやうものなら/からだ中ははずかしさにふるへ/又，火の様にもえてくる」というのであるから，その秘密は，極めて嫌悪すべき，恥ずべき事柄であることがわかる。そして，「自分のからだをひきさいて/ごみための中に/打つちやつてしまつただらう」というところから，この恥ずべき事柄への自らの何らかの関与が感じられなくもない。さらに，「涙は頬をつたひ/胸は苦しさに波打つ」のであるから，もし，秘密の箱に触れて，記憶が蘇るならば，作者は，強い悔恨の念と激しい苦悩に襲われるのである。一方，「人の世を/あざむいてゆく

のだ」という表現からは，作者はその秘密の記憶を消せないけれど，世間には秘密を隠して生きていく覚悟を固めている。そして尚残るのは，作者の虚偽の意識であろうか。ところで，激しい嫌悪は，作者の強い潔癖感から生じるのであるから，裏返せば，この詩の持つ濃厚な秘密性と煩悶も，作者の潔癖感と無関係ではないと思われる。この詩の，嫌悪と羞恥は，『青鞜』の女性論者である生田花世による「汚辱」のイメージと似通っている。生田は「食べることと貞操と」によって，「貞操・処女論争」のきっかけをつくった女性であるが，その文に次のような箇所がある。

> 私の心が崩れていたから彼の男が現れて私の崩れた心に乗じたのであった。・・・・私は静座する時いつもその汚辱がおりて来て，私を見てあざわらったり，おびやかしたりするのを感ずる，而してその汚辱が声をあげて，辱多きもの，野卑なるものと呼ぶのを聞いている。私はその声を心に感ずる時，身体がふるえ，火の上にやかれるような赤面を覚える。そしてその時ほど自己の生きている事に対する不快の強いときはない。
> （「昔の男に対して」，『青鞜』第３巻第12号，大正２年12月，引用は一部新仮名遣いに直した。以下，本稿は，旧仮名遣いは必要に応じ新仮名遣いに直すことにする。）

「なやましき裏面」という詩は佐多が18才の時，生田春月が主宰する青少年の投稿詩誌『文芸通報』に掲載されたものである。佐多の習作詩については，小林裕子が詳しく論じており，「なやましき裏面」についてもかなり踏み込んだ分析をしている。小林論で本稿のテーマに直接関係のある箇所は次の部分である。

> この推論（筆者注：『たけくらべ』の美登利の初潮の解釈に示した佐多の推論）と「なやましき裏面」の詩句とを考え合わせると，佐多稲子自身に関して一つの仮説が浮かび上がってくる。つまり，この詩に表現された煩悶と羞恥は，佐多稲子にも秘密の性的な体験があったのではなかろうかという仮説である。
> （「習作詩の時代―『詩の人生』との関わり」，38頁）

筆者も，「なやましき裏面」が伝える秘密は，性的な事柄ではないかという点においては小林裕子の見解と重なる。しかし，小林裕子の「秘密の体験」は男女の性的な関係を意味していると思われるので，本稿は性的な秘密の内容について小林論と意見を異にする。なぜなら，佐多稲子に秘密の男女の関係があったと仮定することに無理があると考えるからである。小林裕子は，「作者は何度も否定しているが，『素足の娘』に描かれたような処女喪失体験がもし事実とすれば，この詩にあらわれた秘密を抱えて生きる苦しさ，自身を汚れたものとみなす屈辱と悔恨の思いはただちに納得できるものである。」と述べているが，佐多稲子は「この作品を語るときは，必ず，あの場面は虚構なのだと云いつづけている」。そして，小林裕子も繰り返すように，「それは作者自身によって何度も否定されている」のである。例えば，「自己紹介」の中では，「だけど私は一言言い足せばよかった。そんないろんな境遇の中に置かれたけれど，その間に一度の男女関係も，恋愛さえも，下田以前に絶対に無かったってことを言い足せばよかった。」[7] と否定されている。また，次の文も参考になるだろう。

> 私が若いときに働いた料亭の清凌亭主人はその点で親切な人であった。・・・・「身を堅くしておいでよ，娘だからね」と言ってくれたのもこの人である。料理屋の主人が私にそういってくれた。娘は身を堅くすべきもの，というのは私の若い時分の一般的なしつけだけれど，働いている場所で親身に言われたことは，他人の言葉であるだけにそれは親切として心に残った。身を堅くしてよかったかどうかはその後の私の生き方になるが，
> （「『驢馬』の同人たち」，『佐多稲子全集第18巻』，100頁）

佐多が男女の性的体験を否定する言葉の例を挙げれば枚挙に遑が無い。したがって，佐多に男女の性的関係を想定する仮説は外すことが妥当と考える。しかしながら，本稿は，詩によって喚起される強い秘密性を何か性的な事に関係があるとみて，この点には拘っていきたい。つまり，この詩の秘密性を理解することによって，佐多稲子のセクシュアリティのメッセージが聞けるのではないかと期待するものである。そこで，詩の解釈として三つを挙げる。その中の二つは性的なことに関係あるものとして挙げるが，他の一つについては，あらゆる可能性を検討するという意味で性に直接関わりのない読みも念のために挙げた。すなわち，性と切り離した読みとしては，詩の煩悶，悩みは，佐多の貧しさなどの，性的でないことが原因となって生じるとする解釈である。これを第一の読みと名付けるならば，第二の読みは性的で，しかも精神的なこととして仮に「空想」と呼ぶことにする。第三の読みは，性的で，かつ身体的なこととして，これを「何か性的な事柄」と呼ぶ。この「何か性的な事柄」に男女の性的関係は含まれていない。

２．詩の二つの読みとその問題点

ここでは第一の読みと第二の読みの可能性を検討する。本稿は解明の手掛かりを『素足の娘』という自伝小説を中

心とする佐多の作品と生涯に求めるものであるが，ここで，『素足の娘』についてふれておこう。佐多は『素足の娘』の成立事情について「この作品は全体が私自身のある一時期の生活を描いているので，自伝的なものと読まれていた。が作中の松茸狩りの場面は虚構なのである。これを私が書く気になったのは，こういう過去を重荷にする女の悲しみに出会ったからである。新聞の身の上相談欄でそれを見たのが心に残っていた。」と語っている。『素足の娘』は佐多の一時期を描いたものであるから，その時期が佐多の生涯のいつに当たるのか両者を詳しく調べてみることにしよう。年譜に，1918年（大正７年），14才の佐多は，「一家の切羽詰まった困窮を見かねて，相生の父のもとに芸者になりたいと手紙を出す。それを機に，父は相生に稲子を引きとる。」とあるが，作品は，桃代が相生で最初に迎える朝の描写で始まっている。年譜によると，稲子は相生で「家事と父の身の回りの世話をしながら」「気ままに過ごす」。そして稲子が15才の時父が再婚。稲子は16才の時いったん上京して約一年余り清凌亭に勤めるが，1921年，17才の時再び相生の父のもとに戻って，秋までとどまる。この間の上京は作品では省略されている。再度上京した稲子は丸善書店洋品部の女店員になる。作品の世界は1922年(大正11年)，佐多稲子が18才の雪の夜道で終わっている。「なやましき裏面」は大正11年12月10日の掲載となっているから，丁度，『素足の娘』の結末部分に位置する。こうした時期的な連続性からも，『素足の娘』は詩を読み解く際の重要な手掛かりになると考えられる。さて，第一の読みとして挙げた「詩の煩悶，悩みは，貧しさなどの，性的でないことが原因になって生じる」という仮定について検討しよう。筆者はこの仮定が一応成り立つのではないかと考えて検討の候補項目に加えたのであるが，まず，候補に挙げる根拠となったのは佐多の「愛の悩みがもたらしたもの」という一文であった。それは，佐多が，自分の娘時代を説明した文であるが，少々長くなるが，その流れを次に抜粋する。

> 私のいちばんの悩みは，なによりも自分が貧しくて，教育を受けていない，ということであった。‥‥私がその頃，手当たり次第に雑誌や本を読むのは，‥‥少しでも何かを知りたい，少しでも自分の無智を救いたい，という切実なねがいからであった。‥‥生意気になった私は，このときふたたび，自分にあきらめを持ちはじめた。‥‥世間が求めるような娘になろうということであった。‥‥そして素行よろしき娘であった。‥‥このときの私の悩みは，ただ，恋ができない，ということだけではなくて，自分たちの恋愛さえ，その後の生活の予想の中で信じられないということであった。‥‥恋愛も信じられないなどと生意気に見きわめをつけながら，私は自分の胸の中の淋しさに，あえぎつづけていた。‥‥青春の血のたぎるこころの飢えは，始終々々何かを求めつづけているのであった。‥‥求めるものがどうせ，自分などの貧しい境遇では叶えられはしない，とおもうから，この苦しさは，自分の胸の中に深まってゆくばかりであった。私はその頃，生きてゆくことにさえ何の希望も持ちえなくなっていた。‥‥自分の胸に溜まっているものを吐き出さずにはいられなくなった‥‥やっぱり恋をしたい，とおもうのであった。それはあからさまには誰にもいえない。自分ひとりの胸の中のおもいなのである。だから私は，それを紙の上にペンでつづって吐き出した。（『生きるということ』，文芸春秋新社，1965年３月，107～110頁）

佐多の説明を要約すれば，貧しさ故に，一応恋愛を諦めるけれど，それでも，「青春の血のたぎる心の飢え」はしきりに「何かを求め続けてい」て，「誰にもいえない」強い恋愛への憧憬をひとり「胸の中」にしまっておくことが苦しくなって「紙の上にペンでつづって吐き出した。」といえようか。これは，実に論理的な「なやましき裏面」という詩の成立の説明になっている。一方，佐多には，「世間が求めるような娘になろう」というおもいがあって，それは，「ほんとうは彼女の場合，世間の目に対する反抗だった」[8]という。そこに生じる佐多の意識の二重性が自己分裂を招き，虚偽の意識にまで高まったのだろうか。さらに，実生活上の佐多は先に希望のない単調な日々の繰り返しに自殺まで思い詰めたというが，佐多がなぜそのように思い詰めるのかに関して，小林裕子は，「若き日の佐多稲子が，与えられた環境に適応するには，周囲の人間とくらべてあまりに豊かな感受性と，鋭敏な認識力を持っていた」からであると分析している。[9] この分析は，別の言い方をすれば，佐多には物事を深刻にとるところがあるとも言えるだろうが，この感受性の故に，佐多の説明にあった貧困と恋愛へのあきらめが原因となって詩の悩みにつながったという論理を支えるものとなっている。しかし，結局のところ，佐多の説明も，佐多の豊かな感受性も，詩の表す煩悶の激しさを説明するものとまではいえないだろう。また，詩が伝える悩みは，おそらく，一回性の，非日常的な事柄に発していると考えられるので，佐多の説明にある，恋愛への思いや，自己分裂や，単調な生活が詩の悩みを説明するものではないだろう。佐多の説明が一見，詩の悩みの説明として納得できたのは，小林裕子のいう「自己救済のモチーフ」によるのかも知れない。「自己救済のモチーフ」とは，佐多が精神的危機を乗り越えるには二つの方向があり，「一つは過誤を認め，‥‥過去の自分に対する批判を通して，‥‥それ

を基盤に自己を立て直す方向」であり，「もう一つのは自我の崩壊するかもしれぬ危機の原因を，より広く周囲の状況に求め，危機におちいらざるをえなかった自己の正当性を主張して，自我を救済する方向である」[10]。もし佐多の説明が「自己救済のモチーフ」によってなされた救済の一種とすれば，佐多の論理的な説明は後になってなされた事実の再構成ということになるから，青春期の切実なつぶやきである「なやましき裏面」とぴったりこないのは当然であり，何よりも，第一の読みを候補に挙げる根拠が失われるのである。いずれにしても，第一の読みによって詩を解釈することはこの詩を十分解釈することにはならない。とすれば，詩の秘密性は性的なものが関与すると考えられる。では，第二の読みによって詩を十分解釈することは出来るだろうか。第二の読みは性的で，精神的な事による。例えば性的なことを空想することなどで，性的な妄想などもこれに含められる。佐多の青春期に重なる1920年代は，近代のセクシュアリティの規範が極みに達し，一般に浸透していく時期に当たる[11]。そして，この時期に流布した性の言説は，性欲，処女性などであった。佐多が18才のとき読んだという倉田百三は，「愛と認識の出発」で性欲を論じている。倉田は「性欲はいかに避くべからざる生理的要求であっても飽くまでも悪しきものである。恋するものは，その恋を尊ぶ程この悪しき要求を斥くべきである」[12]と説く。倉田の「性欲」は「男女の肉体的交り」であり，「肉交は愛の要求からは起らずに，他の全く異なる要求乃はち性慾から起る」(同上，337頁）という。本稿の「性欲」は倉田のいう「肉交への要求」を意味する。「処女」における性欲が，佐多以前に女性文学者によってどのように捉えられていたかといえば，与謝野晶子には処女の性欲が否定されたが[13]，生田花世では，「あの男に身をまかしたのは私を襲っていた性欲のためであった。そうしてパンのためではなかった。‥‥私の生活を支配する猛獣のような生欲を見出した」[14]と認められている。このように明確な女性の性欲の肯定は，当時としては，画期的なことと言えよう。また，若き佐多が読んでいたというトルストイは，「健康な処女に羞恥はない」として，「処女が15歳を過ぎて健康であれば，彼女は抱いたりさわったりしてもらいたがる。彼女の理性は，まだその理性にとっては未知であり，不可解であるものを恐れている。—これを名づけて純潔，羞恥，という。しかし彼女の肉体はすでに，不可解なものが避けがたく，掟にかなったものであることを知っている。そして理性に逆らって掟の遂行を要求する。」[15]と「処女」の欲望のあり方を表明したという。「肉交への要求」は，また，トルストイのいう「理性に逆らう掟の遂行への要求」とも言えよう。『素足の娘』には，しばしば，「欲情」「欲求」「欲望」「空想」「仮想」「幻想」という言葉によって桃代の異性への関心が表わされている。この「欲情」「空想」が，何を意味するのか。それらが，倉田のいう「肉交への要求」を意味するのであれば，第二の読みは詩の持つ秘密性を説明するものであると考えられる。桃代の「空想」とは何だろうか。作品に探ってみよう。ある夜父の友人である川瀬が泊まることになって，一組しかない蒲団に３人で寝ることになり，「私は今までどおり父と枕を並べ」，「足の方から，川瀬が身体を差し入れる」ことになる。そして，この時も桃代は空想を描く。

> 川瀬は，私と同じ寝床に寝たこの夜のことを，どう彼の心にとどめるだろうか，と何か綾なす空想だけを心に描いた。そのくせ川瀬の肉体からは，肉感的な感じのひとつだって感じはしなかったように思う。‥‥なアんだ，奥さんがあるのか，と，いささか拍子抜けしたような思いも残るのであった。すると，自分の，胸に描いた空想を，見破られはしなかったろうか，と，余計恥ずかしい思いが湧いてくるのであった。
> (『素足の娘』，『佐多稲子全集第３巻』，講談社，1978年２月，24～25頁，以下，『素足の娘』からの引用は頁のみ記す。)

そして，桃代の空想が，さらにくわしく次の箇所に示されている。

> 私はやはり私だけの心の生活を，恣いままにくり展げていた。私の心の中の生活には，好きな男性が，二人，三人と出来ていた。私は自分で自分の放埒さに呆れることがあった。これらの男たちのひとりが，もし私をお嫁さんに欲しい，というならば，私は喜んでゆくだろう，そう思い，空想の中で私は自分をその男たちに結びつけるのであった。おかしなもので，結びつけると言っても，ただ二人で生活をしたり，並んで歩いたり，というような表面的なことだけにすぎなかったけれど，(60～61頁)

又桃代の空想は，後に佐多が「思春期の娘たち」で語る次の言葉に言い尽くされているだろう。

> この時期に，彼女の内側は仮想と，期待に燃えている。が，必ずしもその仮想と期待には欲情を感知していない。彼女は直接的な欲望なしに，仮想し，期待している。異性間のおのずからな牽引は，生理の成長以前にあって，早くから何かしら両性というものを感知しつつ生理の成長がある。すると彼女は，猛烈と異性を感じはじめ，自身の方にも自分の性を強烈に誇示してゆくけれど彼女はまだ何も知らないのだ。あるとき彼女は特定の異性を目ざして，街中を駆け出してゆくほど

の熱情を動作にあらわすけれど，それは肉体の感覚まで伴ってはいないのである。いわば無意識の生の衝動ででもあろうか。彼女の仮想も，それからそれへと飛び移って，放らつなものであるけれど，何にも実体はない。それでいて，彼女は自分はもう何でも知っているつもりである。
(「思春期の娘たち」『女の一生』，酒井書店，1956年11月，76頁)

この文章は桃代の春の「めざめ」と「ざわめき」を要約していると言えよう。桃代の仮想は，「放らつなものであるけれど，何にも実体はない」のである。従って，「肉交への要求」と言えるものではなく，「なやましき裏面」の秘密にも結びつかない。さらに踏み込んで検討を加えるため，「肉交への要求」に近いと考えられる「欲情」という言葉が出てくる箇所をみてみよう。

ひとりきりの部屋の魅惑が私を奔放にさせ始める。私は，初めて自然に生の欲情に目覚めかけている。それは読んでいる本にも関わりはない。‥‥すべてのものから切り離されて，ただそのものとしてあるだけなのであった。(107頁)

この桃代の欲情とは，「思春期の娘たち」の佐多の言葉に照らし合わせて考えるならば，「誰かに見られたい，という欲求」(46頁)，「ああ，きれいになりたい」という「激しい欲望」(50頁)「男性の目の私（筆者注　桃代）にそそがれることをさえ秘かに欲している」こと等をも指すと考えられるが，「私は，目前の雰囲気の中に，もっともっと，深入りしたい欲望をふつふつと感じた。‥‥何かを待っている。その戦くような感覚だけになった。」(124頁)等の表現には必ずしも「肉体の感覚まで伴ってはいないのである。いわば無意識の生の衝動ででもあろうか。」と言い切れるかどうかは別として，結局のところ「何にも実体はない。」ということであろうか。恐らく，「少女雑誌」だけでなく，父親の「中央公論」なども「手当たり次第に読」んでいた桃代は，「小説の中に大人の感情の陰翳を探り始め」(86頁)，自分では「もう何でも知っているつもり」になったのだろう。性欲ということばは，「1910年代あたりから，頻繁に用いられるようになっている。1920年代にいたると，いわば流行語，時代のキーワードとなっているといってよい。」[16]という。1920年といえば佐多16才の時である。『素足の娘』の桃代を見る限り，「欲情」，「空想」は，「肉交への要求」とは言えない。つまり，詩の秘密性を説明するものではないということになる。ところで「性欲はコントロール不能の汚らわしいもの」として，「危険視」された[16]というが，桃代の欲情は暗さとは無縁のところにある。桃代の，「陽に透かしている自分の掌を」「―ああ，わたしの掌柔かできれいだわー」(以上二つ47頁)という表現にあるように桃代の欲情はのびやかで生き生きとしている。『素足の娘』にみられるこの明るさを考慮すると，佐多には娘のセクシュアリティについて，二つの視点があり，二つの視点があることにより，それぞれの視点によるセクシュアリティのメッセージは，色あいを変えている。一つの視点は，「春のめざめ」のただ中にある桃代と「なやましき裏面」を書いた当時の佐多の視点であり，「なやましき裏面」は若き日の佐多をありのままに伝えるメッセージとなっている。第二の視点は，大人になった執筆時の佐多の視点で，桃代を愛情深くあたたかい目で見守っている。『素足の娘』の明るさは，第二の視点によって桃代がとらえられることによって可能となる，大人の佐多の余裕ある視点によって生じており，その視点によって，桃代のかわいさ，哀れさ，こっけいさが，生き生きと捉えられることになる。

3．第三の読みの可能性

最後に，第三の読みの可能性を『素足の娘』と，その時代の性規範によって論証したい。ここで論証しようとするのは，青春期の佐多に「何か性的で，身体的な事柄」を想定することの可能性である。『素足の娘』のテーマは「処女性」に関することであり，又，作品の時代の「女性の一生や人生におけるキーワード」は「処女」「貞操」というダブル・スタンダードの性規範であった[17]。本稿は，第三の読みとしての「性的で，身体的なこと」を，処女性尊重＝純潔主義という性規範に定めて論証する。ということは，『素足の娘』を手掛かりに，男女の関係でない処女喪失を検討することになる。開化セクソロジー（＝性科学）がもたらしたものの一つに「処女膜」の発見がある[18]。そして，「処女膜の紹介と処女性の観念の浮上とは，あいともなっている」(同上，528頁)。さらに，大正初期の処女・貞操論争を経て，「処女性の重視や尊重は，女性のセクシュアリティの物象化を招い」[19]た。こうした背景から処女性尊重には，物象的，身体的な処女性として，処女膜が視野に入るのである。桃代は継母に，「ねえ，母さん，お嫁にゆけば処女であるか処女でないか，分るって，本当？」と尋ねている。作中の処女喪失体験は虚構であるとされるが，『素足の娘』は，佐多の「ある一時期を描いている」のであるから，佐多自身にこのような会話があったものと考えられる。佐多に，このような質問を発する何らかの理由があったとすれば，作中のフィクションは，「何らかの性的な事柄」の代わりということがいえる。桃代の川瀬との処女喪失体験は，「私には，何の感応もなかった。ただ私には抵抗するなど思いも

及ばぬような失われた意志があるばかりだった。感覚的には嫌悪の戦慄が身内を走った。」と書かれている。桃代の処女喪失体験は，「失われた意志」と「嫌悪の戦慄」という言葉に要約される。「失われた意志」による，「嫌悪の戦慄」を呼び起こす性的体験で，男女の関係でないものとは何か。フロイトならばそれを次のように説明するだろうか。

> 本来男根期に属すべき活動，すなわち，陰挺における手淫[20]を，女児は，いつのまにか覚えるようになる。はじめには，何らの空想をいだくことなしに行うのである。身体の世話をすることが，手淫を覚えさせるような影響をもつということは，しばしば考慮に入れられているが，それは想像であることが多い。その場合には母親，乳母，子守女などが誘惑者だとされるのである。女児の手淫が男児のそれよりも珍しいものであり，はじめからはげしく行われるものではないのだということは，確定されないままになっている。もちろん，そのようなこともありうるではあろう。実際に，誘惑がなされることも少なくはない。
> (「女性の性欲について」，『性欲論』，日本教文社，1953年3月，25頁)

フロイトによって，男女の関係によらない「何か性的な事柄」の可能性の一つが説明される。つまり，「手淫」として。しかし，詩の解釈によれば，「何か性的な事柄」とは一回性の事柄と考えられるので，「手淫」ではないということになる。「失われた意志」とあるから，何か無意識のうちになされた出来事といえようか。「春の目ざめの頃」にある桃代は，「無意識の生の衝動」により，「衝動的な振舞い」をしてしまう危うい存在である。桃代の「無意識」について佐多は，「ひとりの少女が無意識によって肉体を汚すが，それによって自分の運命を曲げてしまわず生きてゆく」[21]とも語っている。処女喪失体験後の桃代には，「これまでは，私というものがあるばかりだった。が，今は，私の身体があった。」と感じられ，自己の身体が桃代の意識に上る。しかし，処女喪失体験によって，桃代が自分に見出したのは，「何にも以前と変わったことはなかった。‥‥私は自分のそのことをちゃんと知っている。けれども私は，自分に何ら変わったことを見出さなかった。」ことである。そして，身体の変化によって変わることのない自分を見出した後の桃代は，女にのみ問題にされる「処女性」に，納得できず，その気持を「一度，男を知ったものは，などと変に女を動物的に扱う男たちの知識に対して，何か承服しがたいものがあったのである。ヴァージン，というものにしろ，何かあんまり品物のように扱われている。私は，自分がヴァージンでない，と思わなければならぬ，とすれば，それはどうしてもうなずけないのであった。」と表明している。桃代の言葉は処女性という物象的な性規範に対する抗議ともなっている。物象化の結果用いられる，処女を「失くす」，「捨てる」という言葉は，身体的，物理的な事柄である「処女膜」を喚起する。「処女膜」は，桃代の処女喪失体験と，佐多における「何らかの性的な事柄」をつなぐ要である。「処女膜」の発見をもたらした『造化機論』[22]は，「性という領域を確定するさいのモデルとして登場してきており，ここでの論理が1900年代から外延化し，1920年代に一つの極に達する」[23]のであるが，佐多の青春期は，処女性尊重という，物象的な性規範による抑圧の極みの時期に位置する。佐多に次のような文がある。

> 春の目ざめの頃になり，彼女は異性を見たくなり，また異性に見られたい思いにかられ，そしておのずと自分の唇の結び方にも技巧的になる。‥‥外側にあらわれたこの春の目ざめは，愛らしく，哀れであり，厭らしく，おかしくいじらしいものである。内側からうながされて本能的な動作をしてしまうこの頃に，周囲の愛情ある制御と導きがないならば，彼女はあるいは生理の成長にまみれていくことになるであろう。
> (「思春期の娘たち」，『女の一生』，酒井書店，1956年11月，76頁)

この文章には大人の佐多の愛情に溢れた目を通して，自身も含めた娘たちの姿が伝えられている。内側からうながされた「本能的な動作」や，「生理の成長にまみれてゆくこと」が，「何らかの性的な事柄」に関係あるのかどうかはわからない。もし，それらが具体的な何かを指しているとしても，それは佐多の言葉として語られ記述されていない。したがって本稿は，詩の解釈から「何か性的な事柄」を予測し，他方，桃代の処女喪失体験というフィクションは，佐多の「何か性的な事柄」の代替，あるいはカモフラージュではないかと推論するに止める。そして，本稿に出来ることとして，この予測に立って，「何らかの性的な事柄」が，佐多にとって，如何にして重大性を帯びてくるかを説明し，詩の煩悶を醸成していくかをあとづけよう。処女性に限らず，当時の性の言説は，幾重にも女性に枷をはめていくのであるが，「ロマンティック・ラヴ・イデオロギー」(結婚・恋愛・性の三位一体) は，一見，女性を解放して行くかに見える恋愛を結婚に取り込んで，広く受け入れられるようになる。その過程で，「処女性を尊重し，処女に特別な意味づけ，価値づけをする考え方が強まって」いき，〈「女性は結婚までは処女でいなければならない」という性のダブル・スタンダード＝純潔主義は，かなり強力に女性たちの性行動を枠づけていた〉[24]。桃代には結婚願望があった。それ

は，胸の奥に大切にしまわれた亡き母の遺言とも言うべき手紙に基づいた桃代の夢であった。死ぬ少し前に転地先からくれた母親の手紙には，「ヨクベンキョウヲシテ，ヨイオクサンニナルヨウニ」と書かれていた。よい奥さんになることは，桃代にとって既に不動の人生の目標となっていただろう。そして，春の目ざめを迎えた桃代は，「人を好きになるということは，つまりお嫁さんになることなのであり（92頁），「それ以外の恋愛の場面などどいうものは」想像できなかったのである。恋愛結婚という形の結婚願望は，現代からみて「ロマンティック・ラヴイデオロギー」と称する，その当時の時代の流れを，桃代が内面化していた結果でもあった。恐らく，春の「ざわめき」として，「機会の陥穽」が「失われた意志」において「性的な事柄」をもたらした後，その物理的な事柄が持つ意味を知るに至ったとすれば，少女である佐多は愕然としただろう。父が持つ「家庭医学書」と桃代が手当たり次第に読む「中央公論」「太陽」などの大人の雑誌等が，当時一般に広まっていた性の言説を佐多に伝えただろう。桃代は訝っている，「私はいったい自分の身体を何と説明したらいいのか分からない。いったい，私の秘密というものが，私の身体にどう映っているのだろう。」（146頁）と。「私には，自分の心に何も疚しいことはない。‥‥　それなのに，私はいつ，この何かを負う宿命を持たせられたのだろう。」（同上）という言葉は，桃代と佐多の抗議でもある。「私には，これから，誰かを愛したいという新鮮な希と，憧れさえある。私に，その資格がないと誰がいうことが出来るだろう。」という桃代の言葉は，女性にのみ純潔を要求する処女性尊重という性のダブルスタンダードに対する強い疑いであり，又，「女のことというと，ヴァージンを問題にする，ということが，何故だか私は腹立たしくなるのであった。」という言葉は，さらに強い抗議の言葉となっている。その後桃代がたどる変化は，丸善書店の女店員としての勤めの生活が順調に進む一方で，「何かしら淋しさの胸に沁みてくるのを感じ」（147頁），心の飢えを感じる。『素足の娘』は，桃代が祖母に「今に，いいことがあるでしょう」と言うところで終わっている。丁度この時期に書かれた「なやましき裏面」には，大人の佐多の視点を交えない，若き日の佐多のより率直な「つぶやき」が吐露されていると考えられる。「何か性的な事柄」という仮説を，佐多の強い結婚願望を背景にしてみる時，「なやましき裏面」の沈黙と秘密はより重く納得できるものとなるのである。

4．結論：セクシュアリティのメッセージ

佐多のセクシュアリティのメッセージは二重の声として聞こえてくる。一つの声は，青春のただ中にある佐多の声であり，それは「なやましき裏面」に吐露されたつぶやきとして，又，「素足の娘」の時をリアルタイムに生きる桃代の言葉として聞こえてくる。第二の声は大人の佐多の視点を通したメッセージであり，それは「素足の娘」の桃代を温かく見守る執筆者としての佐多から，又，他の作品で語られる声として色あいを変えて聞こえてくる。

「なやましき裏面」という謎めいた詩をセクシュアリティのメッセージとして捉えることによって聞こえてくるのは，これに反映されている当時の性規範である。「なやましき裏面」の色濃い秘密性は，処女性というダブル・スタンダードの性規範に呪縛された娘の姿を伝えるものと理解する時，初めて首肯できるものである。アドリエンヌ・リッチは，『嘘，秘密，沈黙』という書物の中で，「私たちは時代によってそれぞれ異なる嘘をつくよう要求されてきた。その時代の男たちがどういう嘘を必要としたかに応じたものである。」[25] と述べている。リッチの言葉は，何れも「女に対する女の愛」について語る中で述べられたものであるが，処女性尊重という性規範にとっても示唆的である。「生きのこるための苦闘の中で，私たちは嘘をつく」[26] という言葉は，佐多の「そして，人の世を/あざむいてゆくのだ」という詩句を想起させる。さらにアドリエンヌ・リッチは「私たちは自分のからだの真実を自分に知らせず，あるいは歪めてきた。私たちのいちばん親しい内奥の場所にいて無知のままにされてきた。‥‥　また，私たちが加担した嘘と，私たちが本当だと信じた嘘を見わけることも，むずかしかった。」[26] と述べるが，桃代の「処女」について継母に尋ねる場面と，桃代の「その後に何の変わりがあろう」（89頁）という既成の性規範に対する疑いをも説明するものである。娘時代の佐多（桃代）が発するメッセージは，「ヴァージンというものにしろ，何かあんまり品物のように扱われている」という純潔主義に対する批判である。しかしこのメッセージは，青春期のつぶやきである詩には言葉として明示されず，明確に語られるのは『素足の娘』において大人になった佐多の視点を通じてであった。言うなれば，「なやましき裏面」においては，沈黙という形式をかりて述べられているといえよう。この沈黙と表現という対比についても，リッチによる「私たち自身をみずからの秘密から解放しつつあるのだとすれば，話すことはそれ自体が最初に位置する種類の実践行為である」[27] という言葉は示唆に富んでいる。プロレタリア文学運動の潰走期も終局に追い込まれた1940年に『素足の娘』が書かれたことは，恐らく長い間佐多の胸にわだかまっていた処女性尊重という性規範に対する疑念を一気に噴出させることになり，それによって作品の驚異的な売れ行きの結果，佐多が女性の視点を確立することにつながっただろう。『素足の娘』は，厳しい性規範の呪縛を生き抜いた女性の視点を通して初めて可能になる「女性

の解放」の書であると言えよう。大人の女性としての佐多は，桃代の愛らしさと哀れさを余すところなく生き生きと描いている。作品全体に満ちている明るさは，佐多の愛情にあふれた視点によって初めて可能となる。佐多は，「思春期の娘たち」で，「春の目ざめの無意識に，きらきらとざわめいてゆく時期は，社会全体がこれを保護してゆかねばならないものだとおもう。‥‥彼女自身の生活力を正しく強めるような周囲の愛情と社会全体の良識が保たれるとき，一人々々の春の目ざめは保護されてゆくものであろう。」[28] と述べている。この言葉は，「誰からも構われず」（63頁），ある朝「春の訪れ」（初潮）を迎えて，祖母に言われたとおりにはしたものの，父の家庭医学書に，自分の生理を調べなければならなかった自己の体験を振り返ったものであろうか。古川誠は明治以降の性的規範の形成について述べる中で，「重要なのは，子供の性欲が発見されたことである。可視的な性的行動だけではなく，不可視の領域に息を潜めているまだ発動していない性欲を発見し，管理するという責任が家庭（具体的には母）に負わされた。」[29] と述べている。桃代は世の中で一番欲しいものとして，「自由」と答えている。父親をも含めて世間に対する桃代のメッセージは「世の中って，ほんとうに窮屈なんですもの，自由だったら，自分のしたいように出来るんだったらどんなにいいだろうと思うわ。世間の口なんてものがなくて，娘はこうしなければいけない，なんて規則もなくて」（58，59頁）である。それはセクシュアリティのメッセージというよりは，「秘密」さえ忘れさせる，桃代の「何かわけのわからぬ生活的欲求」の声であった。1947年時の佐多の目を通して，娘の自由への望みは次のように語られる。

> ほんとうに日本娘は，これまで不幸であった。‥‥ほんとうに自然に流れ出る美しさで娘らしさが発揮できなかった‥‥この潑剌としてきた時期を，日本ではただ箱の中にしまいたがり，その娘らしさの生命力を封じ込もうとした。娘は娘らしい時というものを持たずに，すぐ男対女のわくの中に移し植えられてしまうのであった。
>
> （「娘ごころの本体」，『女の一生』，82頁）

「なやましき裏面」は，秘密，沈黙によって伝えられる語られざる佐多稲子の青春期のメッセージである。その沈黙が解かれてメッセージとして語られるのは後に大人の佐多によってであった。「素足の娘」では，秘密は桃代の男女関係による，処女喪失体験というフィクションに置き換えられるが，この構図は秘密が嘘（虚構）によって語られることを示している。従って佐多稲子の青春期のセクシュアリティのメッセージは嘘・秘密・沈黙という形をとって「なやましき裏面」と『素足の娘』の中に語られている。アドリエンヌ・リッチにおいて世間に認知されない「女から女への愛情は，ほとんど完全に沈黙と嘘をつうじて表されてきた」ことを考え合わせると，厳しいセクシュアリティのメッセージはまず「嘘・秘密・沈黙」という形によって表されると言えよう。

おわりに

本稿は「なやましき裏面」という一篇の詩が表わす煩悶の背後に，性の抑圧をみることによって，佐多稲子の娘についてのセクシュアリティのメッセージを読もうと試みた。そして見出したものは処女性尊重という当時の女性の意識に強い枷として作用した厳しい性規範であった。その後，戦後になって，この性規範の抑圧は次第に解かれて，現代においては，「処女性の尊重，処女に対する特別な意味づけはもはや完全に過去の遺物と化している」[30] という見方がある一方，「まだまだ現在もなお根強く生きている」[31] とも言われる。ともあれ，現代は処女性尊重という性規範の抑圧から，佐多の青春時代とは比べものにならない程解放されていることは事実である。最後に，「なやましき裏面」以後の，セクシュアリティの到達点にふれておきたい。現在，新たに性の抑圧として脚光を浴びてきた事柄は，「性同一障害」に起因するホモセクシュアリティ，つまり，一夫一婦制による異性愛に基づく現代の結婚の根拠をも崩しかねないセクシュアリティの事柄である。イヴ・コゾフスキー・セジウィックは『クローゼットの認識論』において，「あらゆる人間が，男か女かのジェンダーに必然的に振り分けられるのと同様に，今度は，ホモかヘテロかのセクシュアリティという，二元化されたアイデンティティのいずれかに必然的に振り分けられる」[32] ことに疑問を提出している。セジヴィックは「サド・マゾヒズムとポルノグラフィに内在する権力関係」についてではあるが，女性の性にふれて，「沈黙，隠ぺい，恐怖，恥辱，これらは女性たちが自分の欲するものについて知識を持たぬよう，まして支配もできぬよう，強制されて来たものではなかったか？」[33] と述べている。まさに，現在のセクシュアリティは，佐多の作品世界が予想もしなかった段階に足を踏み入れたと言えようか。「なやましき裏面」は，秘密，沈黙によって伝えられる，語られざる佐多稲子の青春期のメッセージである。つまり，そこでは沈黙が一つの伝達形式となる。そして，この詩を，沈黙によって伝えられるメッセージであるとみなす時，そのメッセージは，重いセクシュアリティのメッセージである可能性が開けてこよう。

【注】

1 「セクシュアリティ」とは，学的対象とされる時には，人間の内的・外的に示す性，あるいは性現象といったものである。斉藤光，「セクシュアリティ研究の現状と課題」，『セクシュアリティの社会学』，岩波書店，1996年２月，227頁参照。

2 イヴ・コゾフスキー・セジウィックは『クローゼットの認識論』(外岡尚美訳，青土社，1999年６月，105頁)で，19世紀末までには，「知識が性的知識を意味し，秘密が性的秘密を意味することが，完全に一般的に通用するようにな」ったと述べている。

3 1940年に書かれた佐多の初めての書き下ろし小説。

4 佐多稲子が「『たけくらべ』解釈へのひとつの疑問」(「群像」，1985年５月）で「美登利の最後の方での変わりようを，彼女が初潮をむかえたからである」というこれまでの解釈とは異なって，「彼女が身を売らされたと」という解釈をしたことを端緒とする論争。

5 この詩は，『文芸通報』・２巻12号，12月10日号に掲載されたものであるが，引用は，小林裕子『佐多稲子―体験と時間』から引用した。小林裕子，「習作詩の時代―『詩と人生』との関わり」，『佐多稲子―体験と時間』，翰林書房，1997年５月，36～37頁。

6 佐多稲子，『佐多稲子全集第１巻』，講談社，1977年11月。

7 前掲，『佐多稲子全集第１巻』，91頁。

8 佐多稲子，『或る女の戸籍』，『佐多稲子全集第４巻』，講談社，1978年３月，163頁。

9 小林裕子，「佐多稲子における自己救済―初期の自伝作品をめぐって―」，『くれない』３号，59頁。

10 前掲，小林裕子，「佐多稲子における自己救済―初期の自伝作品をめぐって―」，56頁。

11 成田龍一，「性の跳梁　1920年代のセクシュアリティ」，『ジェンダーの日本史・上』，東京大学出版会，1994年11月，547頁，549頁，551頁，552頁。

12 倉田百三，『愛と認識の出発』，岩波書店，1021年10月，352頁。

13 与謝野晶子は「私の貞操観」(『与謝野晶子評論集』，岩波書店，1985年８月）83頁において，「じぶんの経験でいえば，性欲というべきものの意識は処女時代にない。‥‥普通の処女は自分と同じであろうと想われる」と述べている。

14 生田花世，「苦痛にむかひて」，『青鞜』第５巻第５号，220頁。

15 ゴーリキー，「レフ・トルストイ」，『近代世界文学』22，筑摩書房，1975年９月，156頁。

16 川村邦光，『セクシュアリティの近代』慶昌堂印刷，1996年９月，82頁。川村は「性欲の時代とは，そのネガとして男の〝セクシュアリティの病〟を生み出していった時代でもあったといえる。男性雑誌といえる『中央公論』『太陽』といった総合雑誌には，そのような病気を直す薬，強壮剤の広告が目立ってのせられるようになる。」(150頁）とのべている。佐多は『中央公論』『太陽』両雑誌を当時読んでいる。(「私の読書遍歴」，前掲，『佐多稲子全集第17巻』，110頁。)

17 吉澤夏子，「性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤」，『女の文化』，岩波書店，2000年２月，206頁。

18 上野千鶴子，『日本近代思想体系23』　解説，岩波書店，1990年９月，527頁。

19 牟田和恵，「戦略としての女―明治・大正の『女の言説』を巡って」，『思想』，1992年２月，226頁。

20 〈「手淫の害は，処女膜の存在とともに，翻訳セクソロジーによって新しく日本に紹介された観念である。‥‥今日ではマスターベーションの害はほとんど否定されているが，オナニズムからオートエロシズムまで西洋が辿った道を，「手淫」「自瀆」から「自慰」に至るまで日本の「性の近代」は，半世紀で駆け抜けた〉。前掲，上野千鶴子，『日本近代思想体系23』，531～532頁参照。

21 前掲，『佐多稲子全集第17巻』，84頁。

22 「明治八年，合衆国善亜頓（ゼームス・アストン）原撰，日本千葉繁訳述による『造化機論』乾・坤二巻が刊行された。彩色を含む詳細な男女生殖器の図版を計九葉含む本書は，太田典礼によれば〈『解体新書』(1774年）からちょうど百年たって刊行された〉開化期初の記念すべき解剖学的性科学書であった。‥‥ その後，〈造化〉の文字を題名に含む通俗性科学書，性指南書が，翻訳・翻案ものを含めて明治十年代につぎつぎ刊行され，ブームの様相を呈し，『造化機論』は類書の総称となるに至った。」，前掲，上野千鶴子，『日本近代思想体系23』　解説519～520頁参照。

23 前掲，成田龍一，525頁。

24 前掲，吉澤夏子，206頁。

25 アドリエンヌ・リッチ，『嘘，秘密，沈黙』，大島かおり訳，晶文社，1989年７月，320頁。

26 前掲，アドリエンヌ・リッチ，322頁。

27 前掲，アドリエンヌ・リッチ，312頁。

28 前掲，佐多稲子，「思春期の娘たち」，77～78頁。

29 古川誠，「恋愛と性欲の第三帝国」，『現代思想』，1993年７月，119頁。

30 前掲，吉澤夏子，206～207頁。

31 前掲，川村邦光，８頁。

32 前掲，イヴ・コゾフスキー・セジウィック，『クローゼットの認識論』，10頁。

33 前掲，イヴ・コゾフスキー・セジウィック，『クローゼットの認識論』，94頁。